

さくら



令和7年10月17日(金)

読書の秋



子どもの頃、同居していた祖父が読書家で、本棚にはたくさん本がありました。そして、いつも祖父が言うのです。「どんな本でもいいから読んでおけば必ず役に立つ」。このような環境ではあったのですが、これらの本は子どもにとっては小難しいものばかり。とても興味の湧くものではありませんでした。しかし「百科事典」だけは別物でした。小学校高学年の頃から、よく目をとおすようになりました。読めば読むほど興味が高まり、私をわくわくさせるものでした。この経験が私の読書の原点かもしれません。

その後、多くの本との出会いがありました。今でも、本のページをめくらない日はありません。それは単に知識を得るばかりではなく、関心したり、笑ったり、泣いたり、心が温かくなったりと、心の栄養にもなっています。

ここで、高校生の頃に読み、衝撃を受けた本を紹介します。アルベール・カミュ（フランス小説家・ノーベル文学賞受賞）が著した『異邦人』という小説です。この作品は、感情を偽ることなく「ありのまま」に生きる主人公ムルソーが、母の死をきっかけに社会の常識から逸脱した存在として扱われ、不条理な世界に直面する物語です。本質を読み取ることが難しい作品でした。

最近になり、久々にカミュの名前を目にし、『異邦人』を読んだことを思い出しました。そこで、カミュという作家に興味をもって調べいくうちに、彼が残した言葉をいくつも掲載している書籍を見つけました。その中のいくつかを紹介します。

「人間が唯一偉大であるのは、自分を超越するものと闘うからである」

「真冬のさなか、私はついに自分の中に揺るぎない夏があることを悟った」

「希望とは一般に信じられていることとは反対で、あきらめにも等しいものである。そして生きることは、あきらめないことである。」

「涙が出そうになるくらい、生きる」

元気の出る言葉の数々に励まされませんか。

このようにして、本の作者について深掘りすることも、読書の一つの楽しみ方ではないでしょうか。

※今年の読書週間：10月27日から11月9日 2025年の標語：「こころとあたまの、深呼吸。」

※百科事典：あらゆる事柄にわたる知識を集め記し、これを部門別あるいは五十音順などに配列し、解説を加えた書物

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

